

# 子どもの本のひみつ

(題字・イラスト 陣崎草子)

2020年9月26日、オンラインでのトークイベント「子どもの本のひみつ⑧」が中部児童文学会との共催で行われました。ゲストは幼年文学からYA文学まで幅広く創作し、子どもたちにも人気がある、村上しいこさんといとうみくさん。コロナ感染症の拡大で、慣れないオンラインでのイベントでしたが、大笑いのうちに話は盛り上がり…。(まとめ 林美千代)



いとうみくさん

言わせて!



村上しいこさん

子どもに読み聞かせをしていて、わたしにも書けるかも!という勘違いから書き始めた。同人誌に飛び込んで、**物語を書くというのは人間を書くということなのだ**と気が付いた。「文章がうまい」って、ほめ言葉ではないんだな、とも。(書き始めた頃のこと)

『かめきちのおまかせ自由研究』で賞をもらった。編集者さんに、タイトルから名前まで、ほとんど全部書き直してほしいって言われ、**出版するって大変やな**って思った。(書き始めた頃のこと)

読者は意識していない。いつも**主人公の、その子を知りたい**と思って書いている。(子ども読者について)

(読者から)「ぼくがしいこさんの作品を好きなのは、**おとな目線ではなくぼくたち目線で書いてくれているのがうれしい**」って言われたのがうれしい。(子ども読者について)

幼年童話には、「**子どもの代弁者**」という役割が**ひとつある**と思っている。子どもがこぼにできない思いを、文字にして表現する。自分といっしょだ、とか、そうなの!というような「共感」って大事かなと。(幼年童話について)

幼年童話だったら、**子どもたちから肯定的に思ってもらえる話**を書く…。あと、特に幼年童話は、時間とか空間に限りなく自由に羽を伸ばせる、想像力がかきたえられると思うんで、また違う世界観につながっていけるように、**作品の中に幅を持たせたい**とは思っている。(幼年童話について)

しいこさんの世界は、ありえない世界にボンと連れて行ってきて、わくわくするし面白い。あと、関西弁がものすごく効いていて、うらやましい(笑)(村上さんの作品について)

みくさんの『まいごのしにがみ』は、伏線がいっぱいあって。あれが最後に一気に回収されたときは大漁!と思った。すかつとした。(いとうさんの作品について)

**書き方とかは全然違いますが、向き合い方は一緒**。YAはある意味で、厳しいところをついていかないと、現実の子どもたちは、もっと厳しい世界で生きていると思うので。(幼年文学とYA文学の違い)

**幼年童話は、感覚で書いている**感じかなあって。YAの場合は**考える力につながってほしい**。少しでも、ちいさな希望が作品の中でみつけれられたらいいなあと思っている。(幼年文学とYA文学の違い)

コロナ禍で、いままで当然の価値観であるとか概念がすごく変わろうとしている。まだ答えは見つからないし、答えがあるかどうか分からないけれど、**子どもたちが何を思って、どういう新しい価値観であるとか未来を見出そうとしていくのか探っていきたい**。(現在の状況の中で、児童文学を書くことの意味)

コロナでつらい思いをしている子どもたちを見ていると、まだ大人の方が体力もあるし、伝える力があると思う。だから、子どもたちに伝える力をつけてほしいと思うし、それを受け止められるだけの大人がいるってことを子どもたちに伝えたいし、**生まれてきてよかったっていうことを作品の中で書いていきたい**なあって思う。(現在の状況の中で、児童文学を書くことの意味)

## いとう みく

神奈川県生まれ。『糸子の体重計』（童心社）で第46回日本児童文学者協会新人賞、『空へ』（小峰書店）で第39回日本児童文芸家協会賞を受賞。『二日月』（そうえん社）、『チキン!』（文研出版）、『かあちゃん取扱説明書』（童心社）『きみひろくん』（くもん出版）など多数。『季節風』同人。

『きみひろくん』（中田いくみ・絵 くもん出版）

「ぼく」には「きみひろくん」という友だちがいる。「きみひろくん」は、運動も勉強もできる上に性格まで申し分のない小学二年生の男の子なのだが、「ぼく」にだけは嘘をつく。オリンピック選手に選ばれたとか、象を飼っているとか、悪意のない、ちょっと笑えるような嘘なので、付き合っていたのだが、ある日のこと、アメリカに行くことを打ち明けられる…。嘘（空想）でしか自己を解放できない「きみひろくん」の現実とともに、嘘の向こう側に垣間見える「きみひろくん」の気持ちに寄り添う「ぼく」の友情を描く。



『カーネーション』（酒井駒子・画 くもん出版）

中一の日和は、母親である愛子の言動を常に気にかけている。母に愛されていないのではないかと不安を幼い頃から抱き続けていたのだが、五年前に妹の紅子が生まれてからは不安は確信に変わる。母親が見せる表情が日和と紅子とはまるで違うからだ。そして、ある日のこと、日和は心に深い傷を負うことになる…。失望を重ねながらも母親から愛されたいと思わずにはいられない日和の苦悩と日和を愛したくても生理的に愛することができない愛子の葛藤を赤裸々に描く意欲作。



（作家・作品案内 目黒 強）

## 村上 しいこ（むらかみ しいこ）

三重県生まれ。『かめきちのおまかせ自由研究』（岩崎書店）で第37回日本児童文学者協会新人賞、『れいぞうこのなつやすみ』（PHP 研究所）で第17回ひろすけ童話賞、『うたうとは小さないのちのひろいあげ』（講談社）で第53回野間児童文芸賞を受賞。『ねこなんていなきゃよかった』（童心社）など多数。

『かめきちのおまかせ自由研究』

（長谷川義史・絵 岩崎書店）

小学三年生の「かめきち」は、夏休みの自由研究のテーマが決まらずに悩んでいる。同じ悩みを抱えている悪友の「しんご」と一緒にテーマを考えるのだが…。小学生の夏休みの生活をユーモラスに描く。なお、本作では、村上と長谷川がタッグを組んでいる。『れいぞうこのなつやすみ』（PHP 研究所）に始まる「なつやすみ」シリーズにも当てはまるが、村上の物語から感じられるユーモアと温かさが、長谷川の軽妙な画風により増幅され、より魅力的な作品となっている。

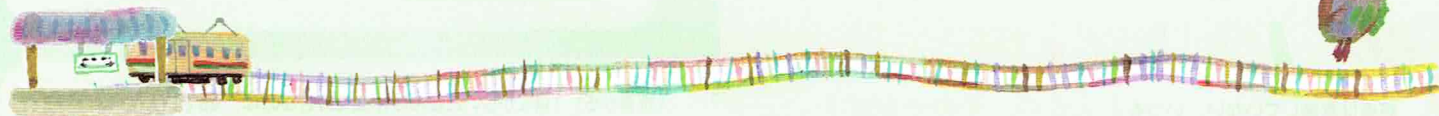


『うたうとは小さないのちのひろいあげ』（講談社）

高校一年生の桃子は友だちを作らないよう過ごしていた。中学時代のいじめがトラウマとなり、同級生の綾美が不登校となり引きこもってしまったからだ。そんな桃子が勧誘されたのが、部員不足で廃部の危機にあった「うた部」であった。綾美との関係に疲弊していた桃子は、居心地のよさに惹かれて「うた部」に入部する。「うた部」で過ごした日々は桃子の心を動かし、綾美との閉塞した関係に変化をもたらすことになる。短歌を詠むように、それぞれの登場人物の心が動く瞬間が繊細にスケッチされている。



## 児文協研究部 「連続トークイベント 子どもの本のひみつ」 編集後記



◆せっかく各地で貴重なお話を聞かせていただくのだから、それをフリーペーパーにして配布できたら…ということで、陣崎さんのイラスト、部員の田中嘉和さんのレイアウトで、ぶじ8号出すことができました。濃いトークの中からポイントとなる言葉を引き出すことも、各地の文学散歩をまとめるのも、書く人それぞれの味があつたと思います。振り返れば楽しい企画でした。（奥山恵）

◆研究部員として2期4年、8回のトークイベントにすべて参加。個性的で魅力的なゲストのトークは少人数だけに濃いものになりました。甲府では昇仙峡に行ったこと、京都の時は翌日になんと大久野島まで足を伸ばしたりしたこと、大火後の糸魚川に2度足を運んだこと……。それぞれが良き思い出となりました。（濱野京子）

◆2017年11月、私は甲府での「子どもの本のひみつ」に一参加者として参加。濱野京子さんの話を直接聞いてみたい一心でした。その翌年から研究部員として関わらせて頂くことに。力不足を感じ悩むこともありましたが、イベント当日は毎回ワクワクドキドキで誰よりも楽しんでいました。ありがとうございました。（田中すみ子）

◆会場に足を運べたのは2回。“あとと、エッセンスをまとめたフリーペーパーをレイアウトすることで接してきた連続トークイベントでした。担当の方に切り取って頂いた、毎回ゲストの印象的な言葉を紙面に配しながら、

「なるほど」とか、「さらに詳しく聞きたい（読みたい）」などと思っていました。今回の取り組みは、作家や作品への入口となる楽しい試みです。（田中嘉和）

◆「連続トークイベント 子どもの本のひみつ」については、第3回でひこ・田中さんの対談相手として登壇した際、お世話になっただけに、恩返しをしたかったのだが、仕事の都合で参加することが叶わず、悔いが残った。「がっぴょうけん」（2019年度）には参加が叶い、編集者や作家の想いを知ることができたのはよい思い出である。（目黒強）

◆たいした戦力にはなれなかったが、スタッフとして、とても貴重な体験をさせてもらった。トークイベントでは、仰ぎ見る作家の方々と身近に接することができ、糸魚川にも行かせてもらった。名古屋での企画がリアル開催でなかったことは心残り。再任と相成って、今度はどんな体験が待っているのか、期待と不安が入り交じる。（池田ゆみる）

◆「名古屋でもトークイベントやっていただけませんか」と言われて、研究部入り。気が付いてみたら、東京、糸魚川、藤沢、とあちこち参加を楽しませてもらいました。肝心の名古屋でのイベントは、コロナ感染症の影響をもちに受け、ZOOM開催となりましたが、ゲストの方、研究部の方々や、中部児童文学会の協力で、有意義なイベントとなり、感謝です。（林美千代）

発行  
日本児童文学者協会 研究部  
2020年12月